

喪失と別離

M・アーノルド「見棄てられた人魚男」

松浦暢

いとし子よ、昨日のことだったのか
湾にひびく美しい鐘の音を聞いたのは。
人魚の家の ほこらの なかふかく
よせては返す 波音にまじり はるか
冴えわたる鐘の音を 聞いたのは。
砂の散りしく、つめたくふかい洞に
風はねむり そよともせず
かすかな光は ふるえ かがやき
海藻は 潮流に ゆれていた。

(三〇—四七行)

アーノルドが匿名Aで発表したこの詩の基調には、のちのアーノルドの詩人としての姿勢や批評家としての主張が、しめされている。閉ざされたヴィクトリア朝社会、とくに中産階級の偽善と凡俗性、俗物根性と派閥主義への抜きがたい嫌悪、偏見にみちた社会通念と教条主義的な教会への批判が、人魚男を見棄てる非情な人間妻と、その後の人間社会へ向けられている。

この解釈は、異教・異端を排除する当時のイギリス社会のキリスト教的理念では、容認できるものではなかった。なるほど、教会の異端の超自然の生物、人魚への迫害は、ワイルドの「漁夫とその魂」にもみられる。同工異曲なが

ら、そこにはワイルド流の批判もみられる。しかし、全体の趨勢としては、アーノルド的解釈は、珍しいものであつた。

口マンチックで、異教的な海底世界と、さびしい海辺の白壁の町、その近くの風の吹きすさぶ丘の上の教会の対照は、異教とキリスト教のそれとパラレルになつてゐる。前者のあたたかく、情熱的な愛情と、後者の功利的で非情な人間のエゴイズムのコントラストをえがき批判する作品、それが、アーノルド（一八二三—一八八八年）の「見棄てられた人魚男」である。そこには、人間の妻にうらぎられた人魚男の喪失と別離の悲哀が、ながれているのは、どうぜんである。

詩のはじめ、美しい人魚の子供をつれた人魚男は、人間妻マーガレットのいる町をながめている。烈風がふきあれ、波しぶきが奔馬のようにあがる人間界の海辺である。荒れくるう海は、異次元にきた人魚男にはやく海へ帰るようにながめしている。しかし、子供の人魚たちは、母を恋しがつて、名前をよびつづける。なぜ、妻のマーガレットは、ふたたび人間世界へ帰つていったのか、（見棄てられた）男は、ノスタルジックに、引用のように回想する。それは、

子供にたずねるというよりは、自問しているようである。
これより先、マーガレットは人魚男の妻となり、ふかい海の洞くつに住み、子供も生まれ平和に暮らしていた。そうした、ある日、波の上から、人間世界の教会の鐘の音が聞えてくる。金髪の末子をあやしているときである。にわかに人里の恋しくなつた女は、口実をつくる。あの鐘の音は、今日が復活祭のしるし、キリスト教信者のわたしも行ってお祈りしないと、（魂を失うわ）（59）と叫ぶ。善良な水精の夫は、あわれに思い、「行くがよい、しかしお祈りの終りしだい／この海の洞に帰つてくるのだよ」（六〇）六一行）と念をおす。しかし、微笑みをうかべて去つた妻は、一度とかえつてこようとはしなかつた。

たまりかねたマーマンは、子供をつれ、海辺の白壁のまち、吹きさらしの丘の灰色の教会へいく。親子は、風雨にさらされた墓石のうえに立ち、窓枠ごとに、なつかしいマーガレットを見る。

しつー！ はやくおいで、皆^{みな}ここだよ
(七七行)

と、声を押しころしていうが、彼女は「こちらを一瞥もせ

「聖書をみつめたまま」（八〇一八一行）だった。教会のドアはかたくしまり、司教の声だけがひびく。おそらく司教は、おまえの夫の人魚は異教の世界のおそろしい生物、魂をもたないため死んでも救済されることはない。そうした異端の人魚世界との縁をたたないかぎり、おまえは精神的に救われることはないと説教したのだろう。こちら（肉親）の呼びかけにも応じないし、いとしい幼な子を振りむきもしないマーガレットの態度に、人魚男は妻の変心を知る。父親として、子供たちに海へ帰るようにすすめる。お母さんは、人間世界にもどつて嬉しそうに歌つてる。にぎやな人間の町、玩具であそぶ子供、教会の鐘、司祭、聖なる泉、紡ぐ糸車、地上の太陽のひかりをうたつている。でも、そのうちに、海の世界に残してきた「幼い人魚娘のふしげな冷たいひとみと／金髪の輝きをおもいだし／ながい溜息をつくのだよ」（一〇五七行）と、なかば、じぶんを納得させるように子供にいう。そのうち、夜になり、灯火がつき、虚空がうなりはじめる、突風が窓をたたき、たのしい人間世界の夢も破れるだろう。われわれには「こはく色の海の天井、真珠の床」の海の家がある。

さあ、いとし子よ、海底へ帰ろう
もう 母をよぶのは およし！
白壁のまち、風ふく海辺の 小さい
灰色の教会を 見おさめして 帰ろう！
日ぐれまで 叫びつづけても
もう 母は 帰ることはない。
(三三一—八行)

みどり色の海の底のアーケードは、非情な教会の灰色の建物よりもましであるし、母に棄てられた悲しみをいややす場もあるという。人間世界と比較したときの、異教世界の優位性と価値を強調しているのだろう。

海に、現し世の女性が 嫁にきたが、
あのひとは つれなかつた。
これから ひとり暮らしとなるのだ
すべてられた海の王なる 人魚は。
(二二〇一一二四行)

作者アーノルドはいう。人魚男の金の王座は、マーガレ

ツの糸紡ぎの車よりも価値がある。かがやくエメラルド

の海の真珠の白さは、単調な人間世界の「白髪のまち」よりもすばらしいと。海の底には、人間世界の合理的な秩序や考え方はないが、それにまさる活力と美しい変化がある。なるほど「人間の町の組織と結びつかないので、〈見棄てられて〉いる」と、人間社会との連帯感の欠如から解釈することもできるが、利己主義的でじぶんの魂の救済のみをはかる人間女に、非情にも〈見棄られた〉という含意もある。

アーノルドがこの詩を書いたのは、デンマーク民謡「アグネスと人魚」を扱ったハンス・アンデルセンの作品『わが人生の実話』(ハウイット英訳(一八四七))を読んでからといわれている。また一説では、J·M·チャーチ『デンマークの民間伝承』のジョージ・ボロウ批評文中の同話に拠つたともいう。

しかし、アーノルド『迷える歓樂者と他の詩篇』(一八四九年)の27の詩のひとつ「見棄てられた人魚男」には、文芸批評家、社会教育者としての彼の一面がよくでている。中産階級、知識階級の子弟に生まれながら、その俗物性、偽善性に批判的であったアーノルドのユニークな解釈をみ

ぬかなければならぬ。

かれは思想的にも、科学と宗教の対立のはざまで、懷疑に苦しんだ。いつてみれば、ロック的理性とカント的直観、ヘレニズムとヘブライズム、古典的均齊美と想像力、チュートン的厳格さと、ケルト的自然崇拜——こうした二元対立のなかで思考したひとであつた。オクスフォード詩学教授の講義『批評論』(一八六五)では、批評家は柔軟で、偏見なく、ものごとを本来あるがままの姿で見るべきだと述べている。おなじ詩学講義『ケルト文学の研究について』(一八六七)でも、功利主義的通俗性に対するものとしてケルト的な神秘主義、想像性を評価している。もともと、オクスフォード存学中に著名な詩の賞であるニューディゲイト・プライズを二歳のとき受賞しているように、批評家としての素養のほかに詩人としての鋭敏な一面のあるアーノルドである。通りいつべんの通俗的な教会牧師の異端輕視や、儀式中心の偽善的信仰へのふかい懷疑があつたにちがいない。懷疑は眞実の知識や愛を求めての作者の真摯な探求のプローセスから生まれるものである。さびしい海辺の白壁のまち、物質的なものに恵まれながらも精神的なものの欠落した人間世界とコントラストに、表面的には荒れ

てゐるが、底はしづかな、異教的な愛にみちた海底の人魚の世界をえがいてゐる。前者の世界には、「魂」をもつた人間がいるものの、実は非情の世界である。これに反して後者は「魂」をもたない水の精の世界ながら、暖かい愛情が支配しているところ。ここには、アーノルドの痛烈な当時の形骸化した文明批判が、異教の人魚へのふかい共感と愛をもとに展開してゐると言ふよ。

〈注〉

- (一) マーケルズ *The Forsaken Merman* (1847～1849) トマス・マーレイ *The Oxford Authors, Matthew Arnold* ed. by Miriam Allott & Robert H. Super (Oxford U. P., 1986) 及び *The Poems of Matthew Arnold* ed. by Kenneth Allott, 2nd. Ed. by Miriam Allott (Longman, 1979) を根拠とする。
- (二) Park Honan : *Matthew Arnold : A Life* (Weidenfeld and Nicolson, 1981), p. 91.
- (三) M. Allott & R. Super : *op. cit.*, p. 512.